

特集 まちの宝

スペーシア的モノ・ヒト・ジョウホウの活かし方

まちの宝とは？

突然ですが、『あなたの「まちの宝」は何ですか？』

この問いに対して、即座に胸を張って堂々と「〇〇です」と答えられるあなたはうらやましい。きっとあなたの住むまちのまちづくりがうまく進んでいるのではないだろうか。

地方分権化が進み、全国画一的金太郎飴的なまちづくりから抜け出し、今ではそれぞれの地域が独自のまちづくり、個性ある取り組みを進めつつある。行政関連のまちづくりで言えば、平成十六年度に新設されたまちづくり交付金制度や景観法も、地域固有の課題を地域独自に解決できるしくみとなっている。昨年のラバダブの特集でとり上げた「全国都市再生モデル調査」もその一つで、稚内から石垣まで、地域独自の提案を重視し、個性的、先進的な取り組みが優先して採用されている。全国三万近くまで増えたNPO法人も地域に根ざしたまちづくり活動をメインにしているものが多い（二〇〇六年十月末時点の認証数は二万九二〇三）。

そういった地域独自のまちづくりを進めるに当たっては、自分たちの住むところに、いかなる「まちの宝」が蓄積され、潜在し、眠っているのかを徹底的に探り、それを基盤とし、創意工夫を凝らして、まちづくりを進めていくプロセスが求められる。

では「まちの宝」とは何か。それは、まちそれぞれで違う。自然、風景、景観、建築物、まちなみ、地域産業、祭り、イベント、食べ物、伝説、コミュニティなど、いろいろなものがあげられ、一つとして同じものはない。その成り立ちも、これまでのまちの歴史の中で、継承され、蓄積されてきたもの、これまで気付かれず見過ごされてきたもの、またはこれから新たにづくり出していくものなど、異なっている。

常滑市で進められている「世間遺産」という取り組みをご存知だろうか。「世界

遺産」のように有名ではないが、町の片隅にひっそりと、そして身近にあり、思わず人に伝えたいような人、物、風景などを「世間遺産」と認定し、後世に残し、伝えていこうという取り組みである。その中では、例えば、あなたの家の裏の路地やあなたの家でさえ「遺産」になるかもしれないのだ。

このように「まちの宝」には、大小、有名・無名を問わず、色々なものが該当する。宝というとしても観光ガイドブックに載っているような風光明媚・源遠流長・威風堂々なるものを考えがちだが、そうではないのだ。

しかし、これが「宝」ではないかというものが見つかったとしても、まちの人々がその価値を認め、共通認識を持たなければならぬ。そして、まちづくりのしくみの中に活かしていくプロセスが必要である。でないと、真の「宝」には育たず、言葉通り、宝の持ち腐れに終わ

ってしまう。『宝』を見つけ、活かす、これは、まちづくりの永遠の普遍的なテーマなのではないだろうか。

スペーシアからの提案

スペーシアでは、業務としてはもちろんのこと、個人としてもさまざまなフィールドでまちづくりに関わっている。その中で、主な役割は往々にして、『どのようように「まちの宝」に育てるか』『どのようように「まちの宝」を活かすか』という部分であるといえる。そういった経験や実績をもとにして、『モノ・ヒト・ジョウホウの活かし方』と題して、スペーシアならではの視点からいくつか提案させていただくのが今回の特集である。

今回、「まちの宝」としてとり上げたものには、「世界遺産」的なものはない。身近なものを中心にとり上げ、誰もが、自分のまちと照らし合わせながら、思い巡らすことのできるものとなっている。具

体的には、「モノ」という視点から、

- ① 公共空間
- ② ストック
- ③ 歴史・景観
- ④ アート
- 「ヒト」という視点から
- ⑤ まちづくり組織
- ⑥ 地域コミュニティ

最後に

⑦ 情報

という七つである。ここにとり上げたのはスペーシアからのほんのひと握りの提案である。もしあなたのまちに、まだ宝と呼べるものがないとしたら、どんなものが身近にありそうか、または、すでに宝があるとしたら、どうすればもっとよいものになるのか、そんなことを頭の片隅に置きながら、読み進んでいただければ幸いである。

